

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第150号

イザヤ 65:1

平成20年3月28日

ユダの王ゼデキヤの第十年、すなわち、ネブカデレザルの第十八年に、主からエレミヤにあったみことば。そのとき、バビロン王の軍勢がエルサレムを包囲中で、預言者エレミヤは、ユダの王の家にある監視の庭に監禁されていた……「私に次のような主のことばがあった。見よ。あなたのおじシャルムの子ハナムエルが、あなたのところに来て、『アナトテにある私の畑を買ってくれ。あなたには買い戻す権利があるのだから。』と言おう。すると、主のことばのとおり、おじの子ハナムエルが私のところ、監視の庭に来て、私に言った。『どうか、ベニヤミンの地のアナトテにある私の畑を買ってください。あなたには所有権もあり、買い戻す権利もありますから、あなたが買い取ってください。』私は、それが主のことばであると知った。そこで私は、おじの子ハナムエルから、アナトテにある畑を買い取り、彼に銀十七シケルを払った。すなわち、証書に署名し、それに封印し、証人を立て、はかりで銀を量り、命令と規則に従って、封印された購入証書と、封印のない証書を取り、おじの子ハナムエルと、購入証書に署名した証人たちと、監視の庭に座しているすべてのユダヤ人の前で、購入証書をマフセヤの子ネリヤの子バルクに渡し、彼らの前で、バルクに命じて言った。「イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。これらの証書、すなわち封印されたこの購入証書と、封印のない証書を取って、土の器の中に入れ、これを長い間、保存せよ。まことに、イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。再びこの国で、家や、畑や、ぶどう畑が買われるようになるのだ。』と。」私は、購入証書をネリヤの子バルクに渡して後、主に祈って言った。「ああ、神、主よ。まことに、あなたは大きな力と、伸ばした御腕とをもって天と地を造られました。あなたには何一つできないことはありません。あなたは……偉大な力強い神、その名は万軍の主です……まことに、主はこう仰せられる……あなたがたが、『この地は荒れ果てて、人間も家畜もいなくなり、カルデア人の手に渡される。』と言っているこの国で、再び畑が買われるようになる。 エレミヤ書32：1－43

バビロンがエルサレムを包囲し、ユダの地がすでにバビロン軍の管轄下に置かれていたある日、いとこのハナムエルがエルサレムの王の家に監禁中のエレミヤのところに来て、郷里のアナトテにある畑地を買ってくれるように頼みました。ハナムエルがやって来る前に主の言葉を前もって聞いていたエレミヤは、神の御旨が「土地を買い戻す権利のある」、すなわち、ハナムエルの親戚、身内の者である自分がその畑地を買うことにあると悟り、公の場で正式な売買契約をし、土地を入手しました。すなわち、多くの証人が見守る中、土地購入証書に署名し、土地の所有権を獲得したのです。

売買契約には二通の証書が交わされました。「封印された購入証書と、封印のない証書」で、おそらく後者「封印のない証書」には、どのようにしてその土地を入手することができるかの詳細が書かれていたのだと思われます。後世、エレミヤの直系、あるいは、傍系の子孫が、入手するために必要な条件を満たしていると認められ、土地を獲得することになると、前者の「封印された購入証書」を開封するにふさわしいとみなされるための、土地所有の手引書であったことが考えられます。これら二通の証書はすぐに役立てられるのではなく、長い間保存されるようにと、土の器の中に保管されたのでした。この土の器は、すべてのユダヤ人の見ているところで、エレミヤの秘書バルクに手渡されました。アナトテはじめユダの全地がもうすぐにもバビロンの支配下に置かれることが分かっていた戦時下で、敵の手に渡る地を正式の手続きを経て買うユダヤ人は当時だれもいなかったでしょう。しかも、一年分の賃金に相当する大金「銀十七シケル」を出して、自分の利得のためではなく、後世の復興を洞察して買うことは、およそこの世の常識からは考えられないことでした。この土地所有に関するエレミヤの一連の行為は、ただ信仰の行為といえるもの、神の言葉への絶対的信頼に基づく行為だったのです。

冒頭に引用したエレミヤ書の件^{くだり}から、エレミヤがこの世の常識を越えた行動をとった背景には、やがて神のタイミングのときにイスラエル、ユダの復興が間違いなく起こるといふ揺るがない信仰があったことは明らかですが、エレミヤが信仰によって確信して民に告げた預言的メッセージ、「まことに、イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。再びこの国で、家や、畑や、ぶどう畑が買われるようになるのだ。』とを、神が少し後に「あなたがたが、『この地は荒れ果てて、人間も家畜もいなくなり、カルデア人の手に渡される。』と言っているこの国で、再び畑が買われるようになる」と同じく繰り返されて、エレミヤのメッセージを全面的に支持されたことは興味深いことです。イエス・キリストは、いちじくの木が主の命じられた言葉によって一晩のうちに枯れてしまった現象に驚いた弟子たちに対して、「まことに、あなたがたに告げます。もし、あなたがたが、信仰を持ち、疑うことがなければ、いちじくの木になされたようなことができるだけでなく、たとい、この山に向かって、『動いて海にはいれ。』と言っても、そのとおりになります。あなたがたが信じて祈り求めるものなら、

何でも与えられます」(マタイ 21:21-22) と、確固とした信仰がこの世に現れる現象に先行することを教えられました。エレミヤのメッセージはまさに信仰を地で行く神のみ旨を先取りした預言でした。

黙示録 5:1-9 には、封印されている「地上のすべての地の購入証書」がだれによって開封されるかを扱った興味深い啓示が記されています。創造の初め、全地の支配権は人類の父祖アダムに与えられました。しかし、アダム(「人」の意)はサタン^{ルシファー}の誘惑に陥り、神のご命令に反逆したことにより、全地を支配する権利を喪失したのです。それ以降、全地は人間の罪のゆえにのろわれ、剥奪者サタンの管轄下に置かれることになったのです。この世が人間の手からサタンの支配下に移ったことは、サタンのキリストへの荒野での挑戦の言葉に表れています。イエス・キリストが地上でのミニストリーを始められる直前、荒野でキリストに挑戦したサタンが試みた誘惑は「(あなたが私を拝むなら) この、**国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう**」(ルカ 4:6) でした。すなわち、この世の支配者は俺様だ! と、横柄にも神の子に向かってサタンは主張したのですが、遠大なるご計画遂行のゆえに神は、サタンがこの世をしばし支配することを許されたのです。しかし、サタンは、自分の狭小な思わくをはるかに超えた大なるご計画を神がしておられようとは、まさか、エデンの園においてすでに、神が仕掛けられた罠に自分がはまってしまっていたとは、気づかなかったようです。イエスの十字架上での死からの永遠のいのちへの甦りによって、サタンの滅びは決定的になったのです。どんなに虚勢を張ろうと、この世を支配し続けるどころか、もはや滅びしかないのがサタンの現実なのです。

イエスはマタイの福音書 13:44 の『隠された宝』のたとえの中で、畑に隠されている宝を見つけた人は、持ち物を全部売り払って、宝のゆえにその畑を買うと語られましたが、従来のキリスト教会の解釈とは正反対に、ここで「**畑**」はこの世、「**宝**」はキリストに従う者のことで、したがって、「**人**」とは、キリストの福音を知り、受け入れた信者のことではなく、キリストご自身であると教えられたのです。ここには、少数であるがゆえにこの世からは顧みられることがない、しかし、主の目には尊い信者、すなわち、主の宝のために畑全部を、すなわち、この世全部を、ご自身を「贖い代」として買ってくださいった主の姿が描かれています。すなわち、このたとえには、キリストを信じ、従う者のためにご自身のいのちと引き換えに「この世」をサタンの手から買い戻してくださった人類の救い主、イエス・キリストご自身が、「畑の買い手」として描かれていたのです。言うまでもなく、キリストがご自分のいのちを犠牲にしても所有したいと思われたのは、サタンの管轄下で罪に汚れてしまった「この世」ではなく、そこに隠されているわずかな「宝」のためだったのです。キリストはご自分のしもべたちのゆえに、この世全体を、ご自分を犠牲にして買い取ってくださったのです。

したがって、敗北と見えたキリストの十字架上での犠牲の死は、実は、全地(この世)の所有権を再びアダム(「人」)の手に戻し、神との関係を最初の正しい状態にするための唯一の勝利の道だったのです。罪のゆえにのろわれ、失われた「地」である「この世」を奪い返すには、「贖い代」を支払って買い戻す以外になかったのです。しかも、全地を買い戻す資格のある者は、最初に全地の支配権が与えられたアダム(人)の親戚、身内の者だけということになるのです。全人類は最初の父祖アダムから派生していますから、人はすべてアダムの身内です。言い換えれば、人を贖うことのできる者は、同じ「人」以外にないということです。

へブル人への手紙の著者は父なる神に服従を誓われたキリストを代弁して、「**あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。あなたは全焼のいけにえと罪のためのいけにえとで満足されませんでした。そこで私は言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについてしるされているとおり、神よ、あなたのみこころを行なうために。』**」(へブル人 10:5-7、付点付加) と語っていますが、人の罪の赦しが動物犠牲で償われる類のものではなく、人の血を流さずして達成できなかったことを言い得ています。神の子が人としてこの世に来なければならなかった(受肉)理由は、モーセに与えられた律法をすべて全うすることのできるだれか、すなわち、「人」を除いては、人の罪の贖いができなかったことにあったのです。これらすべての条件を満たされたキリストは十字架上での死によって人の罪の代価を払い、全地の購入証書を獲得してくださったのです。十字架上での死、埋葬、三日目の甦り、四十日後の昇天を経て、キリストは、今日天の父なる「神の右の座」に着いておられるので、すでに獲得してくださった証書の封印を解いてキリストに従う者たちのために全地を所有してくださるのは、「主の再臨」のときまで延ばされているのです。

ヨハネは、人間史の最後に全地の購入証書の封印を解き、所有するための条件を満たすことのできる人、すなわち、「土地を買い戻す権利のある」アダム(人)の親戚、身内の者が、イエス・キリストをおいて他にだれもないことをヨハネの黙示録 5章で語っています。黙示録 5-19章に語られていることはすべて、この偉大なる人類救済と全地の買い戻しのわががどのような過程で達成されるかを描いたものですが、冒頭で、「**あなたは巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血によりあらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い…**」(黙示録 5:9-10) と、封印を解くことのできる方がただ一人おられることが分かったとき、天界の被造物が大声でキリストをほめたたえ、ひれ伏したのは言うまでもありません。人には不可能な救い—神との和解と全地の復興—をキリストがすべて達成してくださったからです。